

令和5年度 第1回 小田原市社会教育委員会議 概要

- 1 日 時：令和5年6月27日（火）午後2時～午後4時
- 2 場 所：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、小田中委員、加藤委員、齊藤委員、高橋委員、中澤委員、箕輪委員、山本委員
- 4 職 員：柳下教育長、菊地文化部長、小澤スポーツまちづくり担当部長、山下子ども若者部長、中井子ども若者部副部長、田村生涯学習課長、長谷川文化財課副課長、佐次図書館長、瀬戸スポーツ振興担当課長、筒井青少年課長、蓑宮生涯学習課副課長、遠藤生涯学習課副課長、吉野生涯学習課主事
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1 委嘱状交付

小田中大直氏、加藤まゆみ氏、中澤純子氏へ、教育長から委嘱状を交付した。

2 教育長挨拶

柳下教育長から挨拶をした。

3 委員紹介及び職員紹介

出席委員及び職員から、簡単に自己紹介を行った。

4 報告事項

（1）附属機関への委員の推薦について

資料3にもとづき、田村課長から説明した。

（質問等なし）

（2）令和5年度主要な社会教育事業の予定について

資料4に沿って、生涯学習課、文化財課、図書館、スポーツ課、青少年課から説明。

（質問等なし）

（3）「おだわらデジタルミュージアム」オープンについて

資料5及びPR動画により、田村課長から説明した。

【齊藤委員】デジタルミュージアムのアクセスが7万件あったとのことで、素晴らしいコンテンツができたと思う。今後の方向性として、生涯学習・社会教育の振興とは別に、今後の小田原の未来を考えたときに、グローバル化やインバウンドへの対応も必要になるのではないと思うが、現時点で外国人に向けた対応等は考慮しているか。

【田村課長】言語については56カ国語変換機能が付いている。また、デジタルミュージアムの入り口として、小田原市のホームページから入るほか、国立国会図書館の検索システムジャパンサーチとの連携や、観光アプリ「小田原さんぽ」との連携等、広く市民以外の方にも検索しやすいシステムへの充実を図っている。

- 【加藤委員】小学校3年生からの郷土学習で「私たちの小田原」という副読本があるが、キッズ・ミュージアムは、視覚化されていて、より分かりやすく、郷土愛につながっていくと思う。コロナ禍におけるデジタル技術の有効活用にもつながる。
- 【田村課長】PDF化した「私たちの小田原」も掲載しており、目次からも検索しやすくなっている。小田原の自然などは動画もあり、子どもにとっても親しみやすいと思う。

5 協議事項

今期研究テーマの協議について

生涯健康であるための学び

- ・スポーツの振興

資料6, 7に沿って事務局（蓑宮副課長）から説明した。

- 【木村議長】資料の内容に限定せず、自由な発言で構わないとのことで、まずは、体育協会の高橋委員からお願いしたい。

- 【高橋委員】スポーツの原点は、幼児期からの「遊び」が原点だと私は思っている。それが、少しずつ高学年になるにしたがって、その競技にはまって上を目指すのか、遊びで済んでしまうのかに分かれていくのかと思う。質がいいから上を目指そうとすれば「競技スポーツ」に行くし、年齢を重ねてくると、今度は「健康スポーツ」として、健康とどうやってスポーツを結びつけるかという形になってくる。

その中で、その選択をする場を作るのが、小田原市であれば、文化部スポーツ課、あるいは体育協会の各地区の地域団体、振興会なり体育協会である。地域振興会の下を覗いていけば子供会の活動、事業以外に地域に帰って、子どもたちを遊び集めて、何か運動をするというのが、先々ずっとつながって行って、レベルの高いスポーツにもつながってくるのかと思う。

今、一番頭を抱えているのが、自治会・子供会の組織率がかなり落ちていること。一部は、競技スポーツのクラブに移行している子どもたちが非常に多い。一方で、そこから外れた子どもたちは、どこで体を動かしているのかということ、それを取りまとめる子供会組織もなくなってきている。どうやって子どもたちを集めて外へ引っ張り出し、外遊びの面白さ、楽しさを伝えていくのか、真剣に考える必要があるかと思っている。

子供会から、地域スポーツ振興へ、体育協会へとつながっていく、この辺がこの何十年かの間に変わってきているように感じる。もう一回、その辺のところを「社会教育」という観点で議論できたらよいと思う。

競技スポーツを目指す子どもも、その競技を見る人がいないと、なかなかそれ以上の向上はありえない。スポーツイベントをすることも大事だが、それを見に来る人（観客）がいることも大切だと思う。

ただ、運営側とすれば、場の提供だけでなく、運営する人もいなくてはならず、ボランティアが必要となってくる。子どもの頃に、「このおじさんたちがいて、遊ばせてくれていた」という感謝の念から、自分たちが成長した時に、今度は自分たちが地域

の子どもたちを集めるボランティアになる。その辺の連携をどうやって組織化していくか、教えていく必要があるかと思う。小田原市体育協会でも、ボランティアなしで事業が100%運営できるとは思っていない。今までは、地域の役員にボランティア選出をお願いする形で運営をしてきたが、最近は、極力組織に頼らずにボランティアを募って、そのボランティアに活動してもらう形で運営している。

先日（18日）のキッズマラソンでは、ボランティアを募集した中に中学生、高校生もあり、高校の中では「みんなで手伝いに行こう」という組織の体制ができていたところもあった。

既存の各団体が高齢化傾向にある中で、活動できる若者にそれを引き継いでいく、小さいうちから覚えてもらうという、その辺の循環性が必要になってくるかと思う。

【小田中委員】ボランティア等、自ら進んでできる子を育てていこうと、できるだけ自らその意味を伝え、地域に感謝しながらやっていくという姿勢で取り組んでいる途中だが、コロナ禍では全くそれができなかったし、自治会との活動も制約されていたので、やっと今、健民祭のボランティアなど紹介すると、「地域とともにやっていく」ということを実感している状況かと思う。

今、中学校の現場では「部活動の在り方」の見直しが大きな課題になっている。体育協会も含めて、これから地域でどうやって子どもたちを見ていくのか。

教員は、土日も含めてほとんど無償の状態で、超過勤務しながらやっているのが現状で、その中で子どもたちと共に部活動の良さを味わいながら、スポーツ部も文化部も取り組んでいる。

少子化に伴い、子どもの数と部活のバランスが悪くなってきているので、合同チームとしたり、地域スポーツに移管したりしながら、教員の負担も減らしていく必要があるかと考えている。

けれども、部活動の整理も、部活動によっては地域にとって必要であったりするので、もっと組織的に取り組んでいかないと難しいと思う。

現状、先生方をお願いしているのは、「地域の方と共にできる」「顧問が異動してもできる」スポーツ・文化部。それが本校で生き残っていく部活動だという伝え方をしている。それが成り立つかどうかは、地域の人とアポイントメントを取りながら、または小学校と連携しながら、いろいろな形で、全ての部活動が今、実施している状況だと思っている。

地域の指導員を雇うことなどをはじめ、予算化の問題は大きい。委託できないと結局、引率など何から何まで全部、先生がすることになってしまう。そのため、人材確保など、物事を進めるには、どうしても予算が必要になるのは仕方ないと思う。けれども、現状、明確な方向性が見えないので、今は手探り状態で、それぞれの学校が、それぞれできることをやっている。

地域への移行については、いろいろな取り組みが各全国的にも行われているが、すでにクラブチームが今度の中学体育連盟の夏の大会に参加するという段階に来ている。単純に学校代表が出ているわけではなくなっている。クラブチームの子たちと、中学校が対戦する体制がもう現実にある。

市の「部活動の地域移行に向けた推進会議」で、今後どうあるべきかを模索しているが、先進的にやっているところの事例を参考にしながら、小田原市としてはどうすべきかという大綱が出て来ないと、現場はちょっと動けない状況にある。

「お金があるからクラブチームに入れる、お金がない子は、そのスポーツをできない」という状況になりはしないかという「格差」を生みはしないかという懸念について、どうあるべきか小田原市で考えていただかないといけない。

お金があって、どんどん好きな競技スポーツに取り組む子どもたちも現実にいるので、中学校の部活動の参加率もどんどん下がっている。外部団体に委託しても、競技スポーツとしてやっていく子どもたちが増えてきている現状に変わりはないと思う。

様々な施策、好事例、取り組みをされていることも承知しているが、それは全ての子を対象としているのか、参加できる子からまず始めようというのものもあるかとは思ふ。

委託事業的なものがあれば、学校教育とどうやって連携していくのかという大きな課題もあると思っている。

【加藤委員】小学校で感じるのは、やはり「格差」。特にコロナ禍で運動をしない子が増えた。特に、不登校のような子も実際にはいるし、学校に行かなくてもいいような雰囲気が生まれてしまったようにも思える。

行きたくない、怖いからとか、そういったことで余計困ってしまって、運動嫌いが増え、それにともない肥満度も多分上がっていると思う。

また、転びやすいとか、体力がなくなっているのが、スポーツテストにもはっきり出てきている。骨折も増えているなど、一時期より、増えてきたことを感じている。

ご家庭が熱心なところは、クラブチームなどに入っていたり、子供会なんかに参加するところもあるけれども、家庭が忙しくて、子どもに目が届かず、子どもがいつの間にか家にこもってしまったり、外遊びもいいが、逆に遊びっ放しなど、いろいろなご家庭が増えている。

コロナ禍でよりその「格差」が顕著になったと感じる。

健康・運動への関心を高め、行動を起こして行くには「場」が必要になる。地域の受け皿としてのイベント等を発信していても、親がそこまで連れていかれず参加率が低かったり、子供会等の組織が弱まったりしていて、なかなか場がない。

もともとある学童保育や放課後子ども教室等の場に、生涯スポーツのイベント・取組を持ち込んだり、より子どもが集まりやすい学校等で（体育館の空調整備は必要になるかもしれないが）など、工夫が必要と感じている。

【山本委員】子育ての入り口である「妊婦さんと赤ちゃん」という視点で、この10年で変わったのが、育児休暇の導入等で、1年でこのmama's hugを卒業される方が多くなっていることである。

最近では、コロナ禍の中、コミュニティがない状況で育児をされている状況がある。

だから、「コミュニティに所属する」だったり、「コミュニティに入って何かをする、体を動かす」ということを、小田原市の中の「入り口」のところから、当たり前のようにやると、小田原市では、スポーツまでいかななくても、入り口からもう健康になるた

めの第一歩を踏み出せるというのは必要かと思った。

産後鬱というのもすごく増えた。コロナの3年間で言うと、この10年間の3倍から4倍増えていて、3人に1人が産後鬱になっている状況である。

それに対しては、例えばお腹に赤ちゃんがいる時から、できるスポーツをやってみる。その場で、例えば、高齢者の方が、あまりスポーツをやられたことがない方と同じ運動量で参加できるならば、そこに異世代間のコミュニティが生まれる。更に、そこで「自分たちの子育ての時は…」という相談相手にもなってくれると、その「コミュニティ」と、「体を動かすこと」と、「多世代との交流」という、3つの良いことがあるのではないかなと、今日、この資料を見て思った。

体育協会の方が開催している「赤ちゃんダービー」は、良いきっかけになると思う。興味があって来た方が、例えば赤ちゃん体操ではないが、お母さんと体を動かす、あとは先輩のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちと、同じコミュニティの中で体を動かすことができると、より良いのではないかなと思う。

療育が必要な子ども、お金がないと療育を受けられない環境があったりするが、例えば、体が思ったように動かないことだったりとか、療育が必要な子どもたちも運動を取り入れる中で、行かなければできない療育がそこである程度できたりすると、格差が少しでも生まれにくい、子育てする上の格差が少なくなるのかなと、少し気付いたところである。

【中澤委員】私は、小さいときに水泳を習っていたので、今また水泳をやるのであれば全く嫌ではない。やはり、少しでも経験がある、子どもの頃嗜んでいた、身近にあったものというのは再度始めやすいと思う。先ほどの「スポーツの原点は、幼児の遊びから」という話があったが、もっと言うなら、赤ちゃんの時からその入り口があるとよいのではないかなと思う。

小さい時から触れたことのあるスポーツなど、よりたくさんのお機会や経験を持った上で大人になると、いろいろな、「ちょっとやってみよう」と思った時に、自分の好きと経験が背中を押してくれて、始め易くなるのかと感じた。

部活動を地域指導者に頼むにしても、学校教育としてのスポーツだから、あまり勝ち負けに躍起になるのも、それはそれでちょっと違う。教育的観点からスポーツを導いてくれる人を選ぶのも難しいという話もあった。お金も一回200円ぐらいしか地域指導者へ出せないと聞いて、本当に衝撃だった。

小学生の息子は、ミニバスケットで週3回ぐらい運動しているが、それ以外は家でずっとゲームとユーチューブを見ている。公園が家の目の前にあるので、外で遊ぶよう促しても、なかなか重い腰が上がらない。真夏は特に外が暑いので、子どもたちの外遊びも、相当に少ないと思うので、体育館の無料開放などがあれば、ちょっとスポーツをやったりして、結構来る子がいるのではないかなと思う。

【箕輪委員】この3年間、出会うべき時期にそのスポーツと出会えなかった子は、とても多いのではないかなと思う。なかなか体を動かす機会もなく、外歩いても、「あの子、外歩いて

いたよね」って言われるような状況を過ごしていた小学生たちなので、今、大人はどこに行っても平気という感じになっていても、子どもの中では、外に出て自由に遊ぶということを、まだちょっと警戒しているということを少し感じる。

小学校を卒業して中学に入ってから部活動を選ぶという時に、部活動紹介について連携があると良いと思う。うちの近所の中学校では、昔、土曜日の午前中、地域の小学生が部活動の体験ができるということをやっていたので、そういう機会が少しずつ復活して、小学生、中学生の交流ができれば、部活動選びの幅も広がるかと思う。

「総合地域型スポーツクラブ」の指導者の方が、小学校の体育の時間に関わったりと、中学校の部活動に関わったりとかができるならば、部活動までできなくても、地域のこういう場で体を動かせるとか、子どもの立場の選択肢というのが少し広がると、より良いかと思った。

小学校、中学校、高校と経ていくうちに、運動する子、しない子が激しく分かれていく。好きで続けたいという、ゆるい感じで続けられる地域の受け皿があるといいのかなということを感じた。

これからスポーツの環境というのは、自分が経験してきたことを軸にするのではなく、本当に子どもたちを中心にして考えなくてはいけないということをととても感じた。

【有賀委員】放課後子ども教室は、学習支援がメインだが、昨年度、保護者から取ったアンケートを見ると、「勉強以外に、体を動かすことをたくさん取り入れてほしい」という希望が多かった。コロナ禍の影響で子どもの運動する機会が少なくなっていると思われる。

酒匂小学校で、コロナ以前は、縦割り班をつくり、酒匂ミニオリンピックという感じで、みんなで仲良く汗をかく機会を取り入れていたが、コロナ禍で、ここ2、3年はできていない。

今、子どもたちの運動量は、二極化しているように感じる。例えば、スポーツ少年団に入っている子どもたちは、親も熱心だし、より運動する機会が与えられているかと思うが、やはり運動の苦手な子は、どうしても家に閉じこもりがちになって、どんどん運動量の差が広がっていったというイメージは持っている。

子ども教室は本当に短い時間だが、これから学習以外にもなるべく体を動かす機会を増やして、汗をかいてスポーツする楽しさを感じて、最後まで頑張る気持ちを育てていけたら良いと思っている。

そのためには、例えば学校の方には体育館等を使用するようなお願いをすることがあるかと思うので、その辺も連携して子どもたちに力を注いでいけたら良いと思う。

【齊藤委員】子ども自身が引きこもりになっている状況と、運動しないという状況は、自明のとおりで、運動をする子どもたちや熱心な親たちは黙っていても、お金や時間をかけてやるので、小田原市全体ではスポーツや体を動かす子どもの裾野開拓を進めていく必要があるかと思う。

私自身も子どもが朝から晩まで家の中にこもっていて親が困っているという実態を見ているので、裾野開拓を明確に出すのは必要であると思う。

運営者という観点で言うと、「スポット」だと皆手伝いをするが、「継続」だと嫌がる。

「この日のボランティア」というスポット的な募集、例えば土曜日や日曜日だと、家にいるお父さんを想定した見守りボランティアの募集をすとか、やはり家庭の協力を得たり、地域の協力を得るということがとても重要だと思う。

例えば、この日は学校開放で、午前10時から午後4時まで、体育館に誰でも集まれるという場合も、午前中の運営ボランティア、午後の運営ボランティアという形で、スポットで募集すれば、皆手伝うが、学校開放の「委員」となると皆嫌がる。

裾野開拓することを明確に出して、運営者を増やすためには、やはりスポットで協力を得るという取り組みが必要となる。

皆継続してボランティアをやるのは嫌いでも、スポットであらゆることをするのは皆好きなので、この単発ボランティアを広げるのが有効だと思う。

高校生や中学生たちも、スポットでボランティアをしたがるので、例えば、平日の夕方や土・日に、子ども向けに「お兄さんお姉さんたちが一緒に遊んでくれるデー」のような日を1ヶ月に1回設定するのも面白いのではないかと思う。子どもたちが子どもたちで遊ぶのがベストであるし、次世代のボランティア育成にもつながるかもしれない。

親が高齢化していると、見守りとか、鍵とか見ているのは大丈夫だが、子どもと遊ぶのは嫌、辛いという場合もある。そういう意味でも、中学生とか高校生が、一緒に遊んでくれる状況・スタイルがあれば、多世代交流の仕組みや、異年齢との関係作りなどが、今回の基本計画にある「社会力の育成」にもつながると思う。

こうしたワンデイボランティアを広げていくような取り組みの中で、支援者を増やしていくことがとても重要かと思う。

【笹井副議長】スポーツについては、様々ないろいろな種類があって、また、生涯健康である学びと言うとおり、いろいろな世代が学ぶことが必要になってくる。その中で、子どもの場合は、どうしてもルールを守らせるとか、あるいは、何か事故があった時、責任をどうするんだとか、指導者がどうカバーするかというような問題も常について回る。その辺がなかなか難しいところだとも思う。

「総合型地域スポーツクラブ推進事業」は、結構面白いと思っており、ある種の多種目・多世代・多志向という形で、裾野を広げていく、作っていくことが大事だと思っている。それがなかなかできないところは、ある種のスポーツイベントなどで、単発的にボランティアを募集して実施していくのが良いかと思う。

一般に体育の理論というものがあって、「体操」と「個人スポーツ」と「集団スポーツ」と、3つに分けている。「体操」というのは、健康維持そのものが自己目的化、目的になっている、筋トレとか、呼吸機能の改善、エアロビクスとかが該当する。「個人スポーツ」は陸上競技など、ひとりで自分を開発し、自分が楽しみ、自分はそれなりの目標を設定して、自分が向上していくものであり、「集団的スポーツ」が、サッカーや野球、バレーボールのようなものである。

この三つの類型に分けて考えるが、その中で「体操」の範囲がかなり拡大しているのではないかと考えている。例えば、普通は体操と言うと、鉄棒とかをイメージすると思うが、エアロビクスが出てきて、ピラティス、ヨガが出てきて、筋トレもまたブームになったり、自分で健康維持の為に何かしてみようという人たちが、今増えてきている。

「個人スポーツ」の面では、サーフィンやスポーツクライミング、ボルダリング、あるいは、オリンピックの正式種目となったスケートボードとか、ニュースポーツと言われるものが、社会的に大きな位置を占めて来ている。結構そういうものに興味を持つ若い人も多く、個人スポーツの範囲も拡大していると言える。

「集団的スポーツ」はいうまでもなく、野球人気が復活している。

多文化共生の観点も含まれるが、障がい者スポーツ、パラスポーツも、ブームになっている。

このような状況の中、小田原は、どこに重点をおいて、民間のスポーツ施設などと連携して進めていくのかということを考えていった方がいいのではないかなと思う。

これだけ風光明媚で、自然があり、歴史がある小田原には、たくさんの地域資源に恵まれているが、その地域の資源と関連づけたような何かスポーツ振興みたいなものができる、と、すごく面白いだろうとは思っている。

また、高齢の世代に関して言えば、やはり外に出て体を動かす、散歩やラジオ体操をするというのは凄く健康に良いわけで、小田原城で皆でラジオ体操などを行うのも面白いと思う。形になったスポーツ以外でも、気軽に体を動かして楽しめるような機会を、行政としても作って如果能、生涯健康であるための学びにも結構貢献するのかなと思う。

【小田中委員】生涯スポーツに親しむには、生まれた時、よちよち歩きの時もそうだが、そこがスタートかと思った。そのために、親御さんのコミュニティを作っておけるための工夫など、最初の導入がしっかりしていれば続くのかと思った。

それと「資源」のこと、うちの学区には何があるか、何を活用すべきか、コロナ禍で何をすべきか、各団体、それぞれの場所でそれぞれやっているの、それをもっとフラットにできるような状態と、やはり安全に安心して行えるかどうかの保証をしてくれないと難しい、ということだと思う。簡単に今、子どもたちを部活動に誘えないのは、万が一、怪我をさせた時、誰が保障するのかということ、顧問が責められてしまう。そういう状態の中、全部、学校教育がやっているの、そこを担うためにはどうしても予算が必要になる。予算の話をして心苦しいが、予算がないと動きが取れない。

生涯を見通すなら、どこかの入り口をしっかりとやるか、やはり高齢者まで含めて考えるのか、私は、どうしても学校教育の立場で、話をしてしまうが、今、現場は結構苦しいということは何となく伝わったかなとは思っている。

そのような中、全ての子どもたちを守り通せるのか。やはり最初の導入の重要さも改めて認識した。では、どうしたらいいのか。何歳児検診の時など、何らかのアイデアがないと全てにはならないのかと思ったりした。地域でもいろいろとやっている。そ

れを最終的に上がっていったって、私たちはその子たちを最後、社会に貢献する子どもたちに育てていきたいと思っている。

今回の大綱、基本計画が出て、やっと共同体になっているので、学校の立ち位置と生涯学習的な視点をどんどん取り入れて、学校だけが「地域と、地域と」と言っているわけではないので、地域がどの様に学校に入ってくるのかという WIN-WIN の関係にならないといけない。逆に、子どもは本当に忙しくて、中学生になると、塾行って、何と何をして、部活もやっている子なんか、本当に分刻みで動いて、夜 10 時、11 時に塾を終わって帰るとかが現状だと思う。ただ、「土日はどの様にしていっていいか」とか、「その方々の安心安全は」、「日頃見ている先生に見てもらった方がいいのだ」など、いろいろな視点がある。

【高橋委員】支える体制をどうしていくかが大きな課題としてある。一つとして、地域のボランティアを募る、ただ、我々はお金のことまでは考えていない。働き方改革で、先生が時間外や土・日の部活の対応がし難い。そういうところを地域で支えられないかというのが、体育協会の考えの原点である。

今、行政と中学体育連盟、それと体育協会の会長も入って、その体制づくりを協議している。市内の全中学校が一斉にスタートするのは無理なので、最低いくつかの中学校でモデル的に動き始めれば、一つの突破口ができるのではないかという話が出ている。

一日も早く先生の負担を軽減する、子どもたちをもっとのびのび活動させる。これは、スポーツの部活ばかりでなく、吹奏楽であっても先生がいないので、地域の経験者やグループの人たちに声をかけて来てもらう。そのためには、指導方法が一体化しないといけない。先生が教えることと、地域の指導者が教えることが違ってしまうと意味がない。そのすり合わせ、整合性を取らないと、うまくいかないのは、目に見えている。そういう意味では、ボランティアの育成と指導者の統一した教育、勉強会が必要になってくると思う。

スポーツの世界を見回すと、オリンピック一つとっても、昔はアマチュアの祭典だったが、今は、アマチュアもプロも一緒に戦っている。アマチュアを引き上げるにはいいことだが、そのオリンピックの種目も、e スポーツやブレイクダンスが加わるなど、スポーツの世界は年々様変わりしてきているというのが実態である。そういうところでも、一体化した、底辺からの組織作りというものに、取り組んでいかななくてはいけないと思っている。

【木村議長】自治会の立場で言うと、子供会がなくなっていくのも、役をやるのが嫌だと言う理由が一番にある。だから、市内の子供会は減ってきている。

自治会に入っている人からすると、「お年寄りに厚い」という。社会福祉協議会や民生委員児童委員協議会で、高齢者向けの体操をやっているが、実際、子ども対象のものはない。

動ける子どもはスポーツクラブに入ったりしているが、そうでない、運動ができな

い子どもは家の中にずっといる。だから、その辺をなんとかしたいと地域でも考えるが、自治会の役員たちも忙しく、なかなか取り組めていない。

子どものフェスティバルのようなものや、いろいろなことを考えようという雰囲気は出てきたけれど、コロナで地域の「皆で集まって何かやろう」という意識が減退してしまった。そのつけが今、来ている感じがする。敬老会一つを取っても、以前は人を集めて炊き出し等をしていたが、今はお土産を配って終わってしまう。それをまたやろうかと言っても「もういいよ」という話になってしまう。だから、皆と一緒に今までコミュニティを作ってきたものが、少しずつ分断されてきているような感じがする。

その辺をどうしていくのか。先程から出ている子どもの問題も、中学校でもいろいろあるから、学校側に押しつけるだけではいけないし、地域は地域で考えてやっているが、一步踏み込めないところもある。

皆で話し合いながら何とかやっていかないと、コミュニティはもっと崩れていくと思う。時間はかかるかもしれないけど、昔のようにできるみんなが集まって楽しいスポーツや健民祭みたいなことができればいいかなと思っているが、しばらくやっていないと、選手を集めるのも大変である。やはりコロナの影響で時間がかかるのは仕方ないかとも思っている。一つにまとまるのが、大変な時代になってきたことを実感する。

【笹井副議長】 キャンプがスポーツだとは言い難いかもしれないが、レクリエーションであることは確かで、社会教育法でも、社会教育の範囲として、スポーツ、レクリエーションも含むことが書かれている。そういう意味では、参加のハードルが低くて、とても楽しめる。家に閉じこもりがちな大人も子どももいて、そういう人たちが社会参加できるスポーツ・レクリエーションはすごく大事だと思うので、専門的な指導と関係なく、より参加しやすい、スポーツなり、レクリエーションなりを少しずつやってもいいのかなと思った。

【齊藤委員】 資料の話になるが、今ここに書かれている事業の内容について、明確な数や場所等、前年度と比較してどのぐらい増減があったのかという実態が見えてこない。社会教育も評価の時代に入ってきている。事業自体はとても良いものが多いので、数字も含めた評価の視点が必要なのかと思う。

【田村課長】 比較可能となる数字を用いる等、資料作成にあたって検討したいと思う。

【木村議長】 時間となったので、本日の協議はここまでとする。